



越後与板打刃物匠会

技術生かし販路開拓

国の伝統的工芸品の越後与板打刃物をPRする、長岡市与板地域の職人らのグループ「越後与板打刃物匠会」が設立2年目を迎え、活動を本格化させている。生産量の減少や職人の高齢化など危機感を抱ねに、デザイナーや大学生と連携して新製品の開発を模索。与板ブランドを発信しつつ、職人の技術力を生かした新たな販路開拓を狙っている。

(長岡支社・中島映子)

設立2年目、活動本格化

ブランド確立へ奔走

工場。11月の日曜日、美術を学ぶ埼玉大の学生が小刀の製作体験に訪れた。弓形や柄の部分が円柱など、学生が持参した多様なデザイン画を見てすぐに形

デザイナー、大学とも連携

を作る河野さん。学生からは「すごい」「親方は何でも作れる」と驚きの声が上がった。与板地域は戦国時代から400年余続く打刃物の生産地。1986年に国の伝統的工芸品の産地指定を受けた。与板の打刃物は鋭い切れ味が売りで、主力製品はかんざしやのみなどの大工道具。京都の金閣寺などを修繕する宮大工にも使われていて評判は高い。

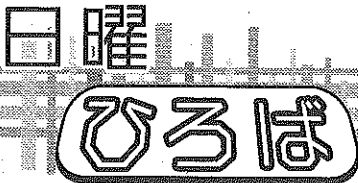
額が大幅に減少。職人らによると、現在の職人数は最盛期の10分の1となる30人ほどで、平均年齢は約65歳。産地全体に危機感が強まる中、有志が昨年設立したのが、越後与板打刃物匠会だ。現在は11人が活動す

たという。そこで、匠会はまだ産地の知名度を上げようと、長岡造形大非常勤講師でクリエイティブディレクターの福田毅さん(68)に依頼してブランドロゴを作製。ロゴをあしらった法被や手ぬぐいなどをそろえた。

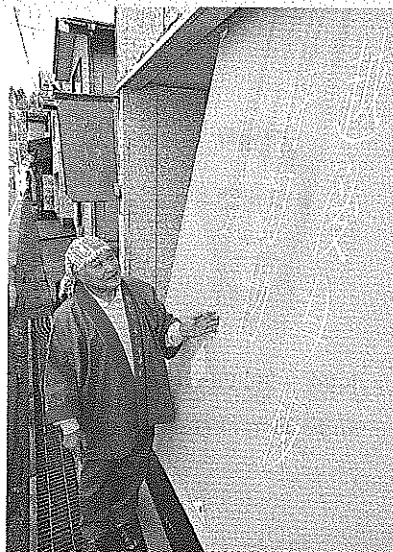
匠会の久住誠一会長(76)は「与板の職人の技術は日本一。大工道具を維持していくためにも新製品で販路をを広げ活路を見いだしたい」と話している。

グループのメンバーで鍛冶職人の河野裕さん(69)の

鍛冶体験に訪れた学生に職人技を披露する河野裕さん。長岡市与板町与板



与板ブランドを発信するために作ったのれんと、法被を着た匠会のメンバー。長岡市与板町与板



の学生からは「医療用メス」や「草刈りかま」などさまざまなアイデアが寄せられた。今年9月には東京で開かれた国際ギフトショーに初出席。具体的な取引開始には至っていないが問い合わせは少なくなかったという。中でも、柄に時絵を施した刀が関心を集めた。匠会は、従来の大工道具にはとられない「新製品への手応えをつかんだ」という。

今後は海外販路も視野に入れ、製品に付ける英語の力する福田さんは「与板は可能性を秘めた町。技術を生かして新製品に挑めば知名度は上がる」と期待する。

長岡大の教員とも手を組む、若者の視点を生かした新製品の提案を依頼。同大